空では火星が赤い光を放ち、笑いころげた。

爆発した星のしん。小ちゃな砂の粒のよう。私が爪で持とうとすると、シャツからポロッと下におちた。

熱く重たい空気には、あだんの香りがひどく混ざる。東の空には にじむようなフラミンゴ色がみえて、私は、いったい酔っているのかと心配ながら、浜と空と海の中で静まりかえったバショウぶきの家をみた。

急に眠けが襲う。なんだか部屋のゴザがとてもなつかしく、星に答えもきかず家に入りぬむり込んだ。

翌朝のこと。光線の大洪水といった中で暑くなってきたところ 仲間達と「ひと潜りしないか」と裏へでた。シュノーケルと水中めがねをぶら下げて。

浜をみた途端、

「あっ、そうだ。みんな星がね、落ちたんだよ。たくさん」口にのぼせていた。

「ゆうべね。みたの、絶対に」

「おまえ酔っぱらって浜で寝たろ。夢だよ。夢」

「夢じゃないもん、本当よ」

「拾ったんか?」

「ううん、眠くて家に入ったの」

みんな本気にしなかった。

波打ぎわに走り寄り、パイプをくわえて海水に入る。表面に浮びながら、コバルトブルーのゼリーの中に、埋めこまれたような石ころのある水の中を、のぞき込み、リーフを目指して漂ってゆく。

コバルトすずめが、ちらちら舞ってゆらめくいそぎんちゃくの波には、クマノミがひそむ。疲れるとテーブルサンゴの上に立ち、十分に私達は遊んだ。

お昼だと 太陽が教えてくれた。浜が戻るように、お腹もせっせと要求している。

浜にあがったとき、私はまたしても企というのは、いつもそうだったため浮力の助けを急に失ない余りに強い重力のため よろけてころんだ。

「あれ!星」

「なんだー?」皆が次々にあがってくる。水中めがねをはずす。ファンを放り出してかけよる。白い砂はきちんとした星型をしていた。

「ほうらね。ゆうべはこれが空気の中を落ちてきたまさつ熱でキラキラしてたのよ。ちゃんと見てよ」浜中が全部星型をした砂でうまっている。

「おい、これ星砂だよな。元からあったよ」

「ふうん。だってさ、ここは星の核の隠居所なんだってよ」と私が言うと なるほどと納得した様だった。さめた星たちは星砂になるのだ。もう二度と宇宙には出ない。微小な砂つぶとしてきれいなすき透った水に毎日洗われるようになる。

私がこの南の島を好きなのと同じに、ここがとても居やすいのにちがいない。

お昼だった。

"明日になればわかる。"という星のことばは、このことではなかったのかな、などと考えながら、パパイヤをいためるにおいにせかされて、ごはんを食べに家に入った。

ところで星砂はケイ素でできているそうだが、星の核というのはケイ素なんかな。ま、よいや、午後からは、また潜るのだから。

おしまい

五色の豆

みなさんは、どうして五色豆が五色なのか知っていますか。それは、雲の上のことを知らない人にはわかりません。

そのころは平安時代と呼ばれているじぶんの事です。

雲の上には鬼が五人（彼らは一ぴきニひきといわれるのが嫌いでした）住んでいたそうです。

彼らは赤鬼、黄鬼、白鬼、茶鬼の五人でした。

そのころの雲の上は怒りっぽい赤鬼が時々ひとりでイライラして地上に電気を投げつける以外は　平和で暮しやすい住みかだったのです。

ところがある日、青鬼が黄鬼の所へ遊びに行った時のことでした。黄鬼はお茶といり豆をだしました。すると青鬼はそのいり豆が大好物だったので全部、一粒残らず食べてしまったのです。

そうなると、自分で出しておきながらケチの黄鬼は

「やあ、しまった。何だかとっても損をしたような気がしたぞ」と感じたのでした。そして

「赤鬼の所にもいり豆があるそうだ。それをみんな食べれば、青鬼が食べた分くらいにはなるだろう」と考えて、赤鬼の所へいきました。そこで黄鬼は一生懸命たべたので、赤鬼はせっかく出したいり豆を一粒もたべられません。

「なんと図々しい奴だ！そんなにほしけりゃ投げつけてやる」怒りっぽい赤鬼は「ほら　いり豆だぞ。食え、食え」といいながら　堅い豆を黄鬼に投げつけました。

そこへ騒ぎをききつけて　他の鬼たちもやってきて　茶鬼は

「青鬼、悪い！」といいました。白鬼は「黄鬼のごうつくばり」といい、黄鬼は「赤鬼のおこりんぼ」と大声をだしました。青鬼ときたら、青くなって震えながら悪気じゃなかった…とオイオイ泣きはじめる始末でした。

かくて豆の投げ合いが始まり、不思議なことに　そのたくさんの豆は雲の中を通り　水滴をまわりにつけて冷えたりしているうちに、赤鬼の投げた豆は赤に、黄鬼のは黄に、白鬼のは白に、青鬼のは青、そして茶鬼のは茶色の砂糖衣をきてその上茶鬼のはニッキのにおいまでついた、おいしい五色の豆になっていたのです。

その日、雲の下の都は大騒ぎ。

真白な雲の中から　五色のまあるいキラキラ光る砂糖菓子が　所かまわず一朱雀大路にも五条大橋にも御所にまで一落ちてきたのですから。

子供たちは大喜び。走り回って　その豆を集めました。

おとなは

「何と不思議なことがあるものだ」と寄り合っては話しました。

けれども　鬼たちはそれどころではありません。

けんかがひどくなって　みんなで平和に住むことができなくなってしまったのです。

豆があたってヒリヒリする体をさすりながら　白鬼は川の中へ、黄鬼は林へ茶鬼は山へ、そして青鬼と赤鬼は地面に住むことにしました。

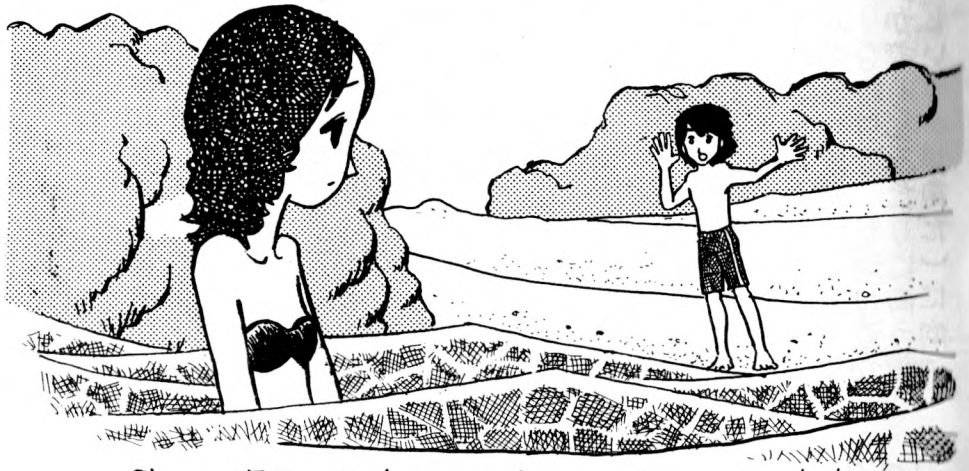
そしてその時から空の上には誰も住ま

ず、唯時々赤鬼が忘れていった電気が、勝手にパチパチとはぜているだけになったのです。

だから、気象衛星や飛行機や望遠鏡も雲の上にのった鬼を見つけることはできないし、お菓子屋さんは降ってきた五色豆があまりにもおいしかったので、今でも砂糖衣でくるんだ五色豆を作っているのだそうです。

おしまい

ハリーハンプトンの手紙



私はいいかげん浅い所まで帰って来てキラキラした折紙の細切れをふりまいた様にじゃれつくコバルト・スズメの一群を追いかけたりしながら、潜ってきた。

それに暖い水の上を漂っていた。その日も朝から一列に浮び、太陽はまぶしかった。

私とパートナーの子は、直潜りの様な雲が一ケルとメガネを持って星砂と話を決め、早速・足びれを肩にかつぎ、シコノーケルを口にくわえ、浜へと飛び出して来た。まずは、リーフまで泳ぎ、程度といった感じで潜って来た所であった。

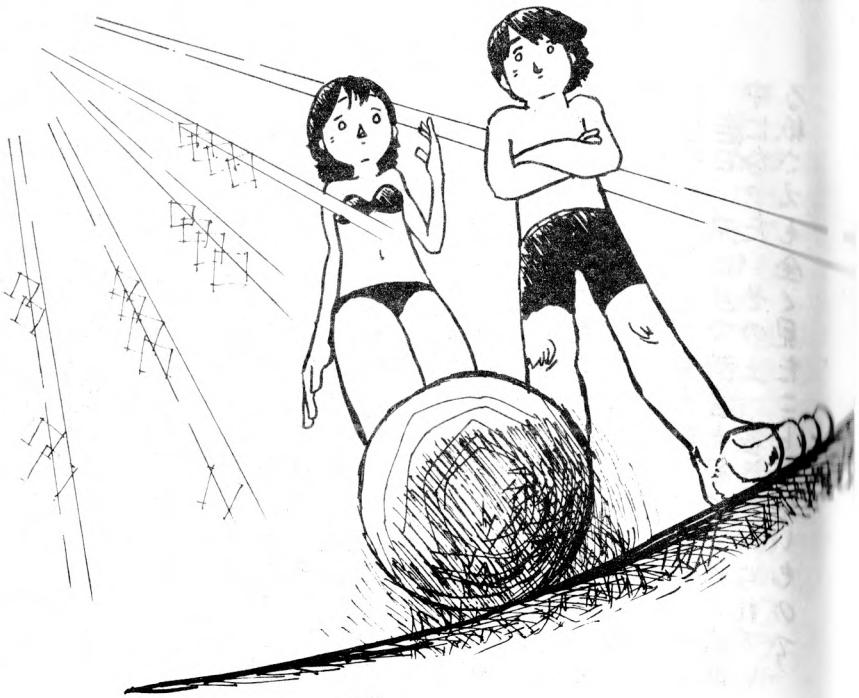
ふっと気付くと浜の方で「ちょっと！来て！」明子が呼んでいる。グリーンのキラキラ光る大きな浮玉のようなものを持っている所を見ると拾いものらしかった。

私は大急ぎでシコノーケルを口にくわえ、サンゴにひっかからぬよう、幾らか深い迷路めいた枝の間をぬって浜に向う。

それは奇妙なものだった。普段、浮玉というのは魚を採る網に付けて、ブイとうきの役をさせるもので

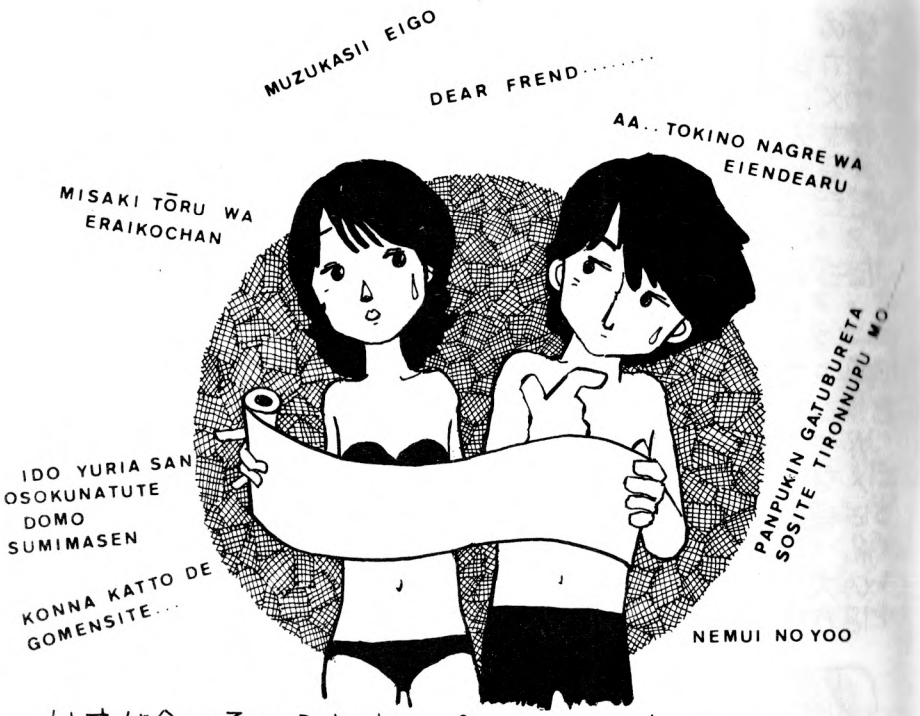
ガラスの風船のような物と思えばよい。
透明なところが了の持っているそれは、不
チン様のもので成っており、まるでとて
も大きな貝の卵かなんかのようなのだ。
そのの上、付着しているはずのあのしぶ
といフジツボやらカメノテやらが見あた
らず、すべすべで海草のにおいがした。
「ねっ、おかしいと思うだろ。絶対変だよ
プラスチックのはずないしね。」
「もしかして台湾から流れて来たのじゃ
ないの？」
「新型バクダンとか。」
「ギドカーン！」
了はその浮玉を放り投げてしまった。
しかし、その グリーンのボールは、弾み
もせずに、ポタ と砂の上に落ちたきり
動きもしなかった。
冷静に考えてみれば、この辺は北赤道
海流の一部が日本海流（黒潮）となって
上って来るあたりなわけで、台湾付近か
ら逆に、シンガポールあたりに向う複
雑な海流が下へというのは南だ）に向っ
ている。
すると、ね、これは、ナントカ諸
島とかたくさある太平洋のド真中辺から
来たのかな。」
と私が呟き、了がっわあ……」とか何と
か言った様に覚えている。
これが実にその所在が明らかになった
今、偶然とはいえ、当っており、二人と
もひどく驚いてしまった。
つまり私達は、好奇心に耐えかねて、
そのゴムマリ様のものを割ってみようと
あらゆる手を尽した。結果、苦難の末
に、遂に中をみることができたのだ。
材質は実に柔軟でかたかった。
まず最初、誰でもする様に棒切れでたた
いてみたがビクともしない。ただ中空に
なっているらしい事は音でわかった。
石に打ちつけた。サンゴの破片で傷をつ
けようとした。ガラスのかけらも空カン
の切れっ端も使ってみた。ダメだった。
二人が良いかげんうんざりして、それを
浜に残したまま、少々潜って何か鋭いも
のでも見付けようと、ペパーミントゼ
リーの様な水に入って帰って来たとき

だった。
「あれ？」了が大きな声をあげた。
南の島の強い日射しの中に一時間以上も
さらされた浮玉は、まっ白に塩がふいて
しわがよっていた。しかもグリーンだっ
たものが茶色く変色しかけている。
「きっと切れるよ。これ、新種の海草じ
ゃないかな。ほら、マリモみたいなやつ
ーエ：あれは北海道。しかも淡水じゃ
ないし。」
「だからさ、新種だよ。学名に俺の名前
つけるかな――もしかして。」
「あっ。」
「わっ。」
嘘。
鋭く割られたカラス貝の尖端が、ザ
クッと切れ込みを入れたのだった。
切り口からはモズクに似た海草(?)がのぞ
き、腐ったような臭いが鼻をついた。
「やめようよ、了、くさい。」
「待って、これ、おかしいよ、筋肉でで
きてるみたいだもの。」
了は手が茶色と緑のあいの子になるの
もかまわず、中のもずく様のものをひっ



ぱり出してしまった。
『コト・』浜の石に何か落ちてあたった。それは小さな円筒型の明らかに人造物とわかる紙をまいて作ったシリンダーだった。孔は色の付いた両手を海でバシャバシャッと洗うと、それをつまみあげて通信文だよ、きっと入れるビンがなかったからさ、ポリ容器に入れたんだ。閉けたらさ、help me! とかね。」
ひどくはしゃいでいる。
私は「何かのコマーシャルじゃないの？ほら、カプセルに入った紙を拾ったら時計とかいうのあるとかえてくれるとかいうのあるじゃない？」等言いながら興味津々でほどいてみた。
中には細かい字でびっしりと何事か書き込んであった。
そしてそれはnuffでもなく商品の宣伝でもないように思われた。というのもそれが英文であるためその場では私達二人の手にはとても負えなかったからだ。
「おい明子、読めるよな、おまえ、おとつい外人に道、教えたろ。」

「孔英文学科じゃないっけ？私は文盲なのですからね。話せるけど読めないの。何しろ"body language"って、ふるえが止まっやだ。俺、英文見ると、ふるえが止まんなくなる。」
ふん・別に中が知りたくないならいいのよといいね。」
「具合に責任のなすりあいをやったりながら、パイナップル畑のド真中に建つバショウぶきの家に帰って来た。
結局、二人で一夏かけて辞書と首っぴきで訳した文章は、実にたいへんなものだった。
あんなに小さな紙切れの固まりと思った筒型だったのに、半径4.5cm、高さ10cm程度の円トレーシングペーパーの様に薄く薄くのびて、巨大な量の英文が出てきたため、私も孔もいいかげんうんざりだと言いあっていた。
しかし、浜にまで辞書を持ってゆく程夢中になった。その上、書きつけられている紙さえも全く見たこともないもので、



水にぬれてもまるでキチン質かクラチラ層のようなつやを持ちけっして浸みることがなかった。書かれているインクはウニの卵のようなオレンジだったし、孔達はその紙の水に流れ去った今となってはそのの存在は証明のしようもないが、私達孔がそ悩みながらも完成させた翻訳を受けて書いてみたいと思う。
そうでもしなければ信じられない気がするので……

★Dear 決して見えぬ友へ★

誰か、今、ここの通信文を入れたボールを拾ったすい人は、その文章を読んでくれたこと。
ばしば遠いはいない神様の御意志が働いているこ
間ハリー程の幸運な偶然と言えよう。
私はハンプトン・元は海軍士官。この文を英語の解
ッの海軍士官。この文を英語の解
に入れてくれるかどうか予想もつ
の満足のためにも
かない手を使い、心しのためにも
ばない。当初から今の私の身に至る
余暇を使ためにも紙面に限り
つるためにめた。
ス
テ
ー
ッ
ス
ま
で
を
書
き
連
ね
る
以
外
に
な
い
。
あ
と
の
事
君
達
で
考
え
て
も
ら
い
た
い
。

そもそもの初め、長年の夢であった太平洋の真中に近いラタク諸島の中の小さなリーフに囲まれた島に来ていた。

そこには予想通り、実に美しく、素晴らしい海と空があり、私は大変感激した。毎日朝から晩まで海に潜り続け、私の吐く息は、耳の横をゴボゴボと通り過ぎた。イソギンチャクの触手の中にはクマノミが出入りし、みごとなテーブルサンゴのふちに腰かけていれば、南の日射しはもあきる事などなかった。

水を通すとガラス天井にブルーのセロハンをしき模様に切ってはりつけたようにみえた。チョウチョウオが舞い、いろあざやかなシャコ貝の口が岩の上、いたる所に見えていた。

一週間がすぎた頃、東の浜に大きな海ガメがあがったという話がきこえてきた。ふと見てみようかと思い、日を選って見にいった。現地の人が群れている所で前にいった。目の前にそのカメを入れてくれとどなり、大きなオサガメを見た。ショッキングな程大きなカメだった。一瞬、カメは私のほうを見て、心なしか何か言いたそうな目をしたように思え、太い綱でぐるぐるまきにされたそのカメを、どうするのかとまわりの人々に尋ねた。

「それは決っている。カメはスープだ。」

「甲らは高く売れる。」

「この島は一年も二年も豊かに暮らせるだろう。」と答えた。

私は海がメに対する後めたさを覚えながらも、一旦は納得して、その日、初めて潜る岬へと急いだ。

しかし夜になり眠りにつこうとしてもなかなかだけだるい疲れは、確かに全身を包みこんでいるというのに、昼間見たカメのまなざしが思い出されて意識は冴え寝つかれない。今頃は、あの浜にも、誰も居らず、晴れた、青っぽい月の光の中に綱でまかれ、くいにしばりつけられたウミガメの姿がポカッと浮かんで見える。

耐えられなかった。

私は起きあがり、浜へ急いだ。私の思い描いた通りの情景が一枚の画のように現われた。砂を踏んで近づくとカメは首をあげ、こっちを見た。私は、自分の手にナイフが握られているのに気付き、落ちつかない気持ちで、太い綱を切りにかかった。

背中にポッポッと汗が浮き出し、あごからも一滴、二滴、砂の上におちる頃、やっと前足を縛っている二本を切った。

海のにおいが急に強くなったようで、目に入りそうな汗をふこうと顔をあげた時、水の中に人影がちらっと動き、急に二人の男が水をけって伸びあがった。

私は、一瞬、現地の人間と思い後手にナイフをかくした。キュルルルと、イルカの鳴き声のような声がきこえ、私の頭の中にはへどうぞ続けて〉という意味が感じられた。いぶかしく思い浜に上って来た男達を疑視する。月を背負っているため顔がみえない。

ヒタヒタと音を立てて近寄る足元に目がとまるとヒギョッとしてナイフをかまえると、また、キュ…クゥ…クゥッ…と声がした。へ心配ないカメを自由に〉それから後は私の脳裏に親愛をこめた思念とでもいったウェーブが流れ込み、不器用な彼らの

手ではできない綱を切る作業を私は続けた。この島の空が白みはじめた頃
由になった。人々の期待である海がメは自
ご居多分もうここには
礁れを頭にだろうと私は思い素晴らしいサン
はやくうかべて苦っぽい後悔の心
がなにも動きはじめてフラットな顔に一
奇妙な人の男はフラットな顔に一
盛りあがるんだ目で私の事を見ながら
今度はカンン高い声で何事か囁きあっ
その所。その声が聞こえたり途切れた
の所から彼らは私の可聴域ぎりぎり
音波を使っていると思わ
私はいるらしい次第に雲のふちが
ゴの羽えばい色に染まりはぼんやりと立ちつくしていた。

彼らの話がまとまったらしく大きな水
かきのつい手を広げて私を呼んでいる
ようにに見えた。結局私は彼らに
て海の中へゆく事を承諾し一人が腰に
つけた海藻のかたまりの中からチューイ
ンガムの様なものを私に差しだして口に
含むようにと指示した。

それは口の中でだ液に触れた途端酸素をプツプツとたてはじめた。
私は完全な思考停止を起しており大きな海がメの甲羅の首に手をかけながら海の中へと進んで行った。陸の上ではあんなに動きの鈍かった海がメも大きな前肢の一打ちで右に左にローリングしながら次第にきらめきはじめた海の中を大変なスピードで舞い落ちていった。
通り過ぎる岩々は表現のしようもない程美しく無数の金色に輝く細い触手を持つハタゴイソギンチャクはまるで黄金の波がうねるようである。
岩かげにはガンガゼの長い針がクイーン・エンゼルフィッシュが紺青の地肌に黄金のテープをまとって舞い散っている。岩礁をまわった途端目の前一面がぱあっと明るくなり一面真赤なイソバナが咲き乱れていたりもした。
次第に暗青色を増す海の中に白っぽいマリンスノウがまじりはじめハダカイワシが光を発して泳いでゆく相当の深海だろうと思われ、あまりの圧力の強さに私は考えることもできなかった。

放心した私脳裏に閃光がひらめきへっていたへというサインを受けとった。
その瞬間私は果てしのない暗い淵に落ち込むように眠り込んでしまったようだった。
目がさめた時は自分がいったい何処に居るのか皆目見当がつかなかった。
湿ったベッドの感触が気持悪くふっと見ると目にはまるく湾曲したボールの内部のような壁が映った。体は水を吸った綿の様に重くなるのも一苦労だった。手を上げると昨夜(だろうか?)物の気配を感じ首をまわすとの記憶を呼びもどさずにはおかない顔がそこにあった。
ヘイキか?リクの人は1000ネンまえにきたきりなのでッゴウのわるいことは言ってくれ。
ということが思いだされて。そこが海の底という様なわけで
原因とわかっただされた。彼が部屋の近の圧力が禍の
と私は楽に呼吸もできず手足も動かせる
ようになったため起き上ってその男と
不自由ながらも会話らしい思考を交した

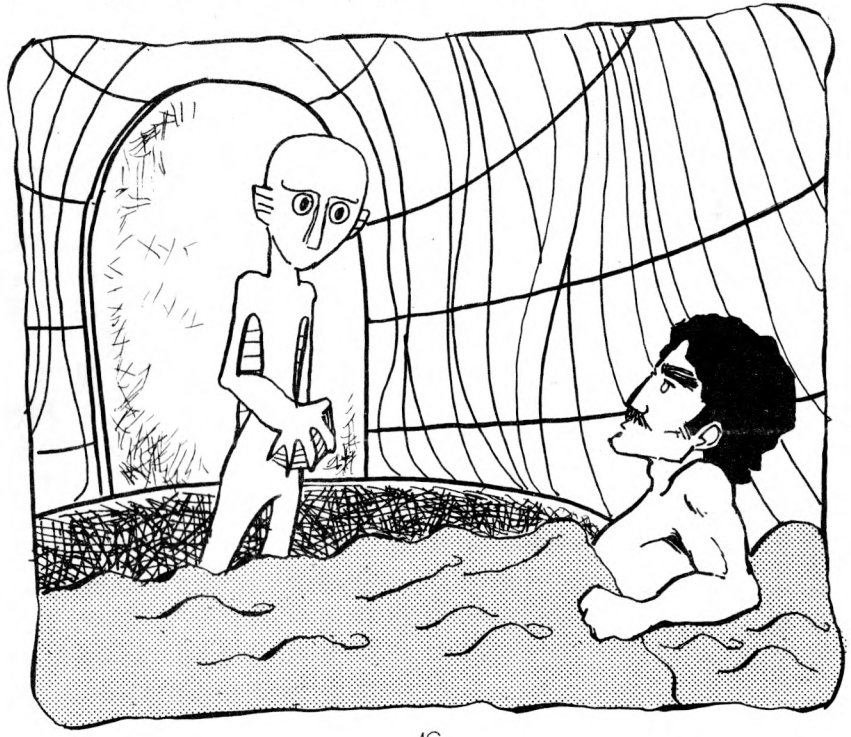
食べ物は、大きなミートボールの様でまずくなかった。男は私が十分に正常な自分をとり戻した頃、部屋から外に続く通路を示し、ゆくかと尋ねた。

好奇心が頭をもたげはじめた所でもあったし、私は男の後に続いた。しかし通路に入った瞬間、足元から水がせりあがってきて、私はあやうく死ぬ所だった。

（ただし、ショックでだが。）私の恐怖を察してか、その水棲人はかるく私の肩をたたいた。そこには何か小さなつぶのようなできものがあるのが感じられたが、それが何を意味するのかは、その時パニック状態で理解できなかった。

次の瞬間、海水が目にしみて、我に返った私は水を呼吸している自分を発見した。彼らは、私の体に手を加えたらしかった。いやな気分ではなかった。部屋の中で、私は、確かに空気だって呼吸できたのだから。

それからの生活を詳しく描く事は必要ないだろう。私は歓迎されたし、十分ここの生活に溶けいることができた。毎日の暮らしは、確かに忙しく、海の中



にあっては、人間が最強の者というわけでもないため危険に満ちてはいる。けれどそれ故、厳しい外敵という一つの攻撃目標を持った人々は、十分に生活を楽しみ協力しあって暮らしている様に思える。地上には、自然を我々の手中におさめたと信じ、何の不安もないため、自らすすんで戦闘をつくり出さずにはおれない傲慢な人間達が満ち溢れているのだろう。

私は、この世界が、君達だけのものではないという事を知らせてみたかった。そしてまた自分自身が地上に生まれ、人間同士で戦うという経験を持った事があったことを証明するために、書きつけた。

信じるかどうかは、君達にまかせよう。

＊　＊　＊

これだけの文章を訳しおえて、私とJは、ホウッと、大きなため息をついた。

「要するに、フィクションだよ。SFM にでも送りつけて欲しいとか……」

Jはぽつっと言ってみた。

「何も言えないよ。」

私は、本当らしく思えたのでそう言った。二人とも、この不思議な紙やら、もうすっかりくちゃくちゃになった、海草の様なボールの残骸に目をやって、やはりこれは本当だろうと考えた。

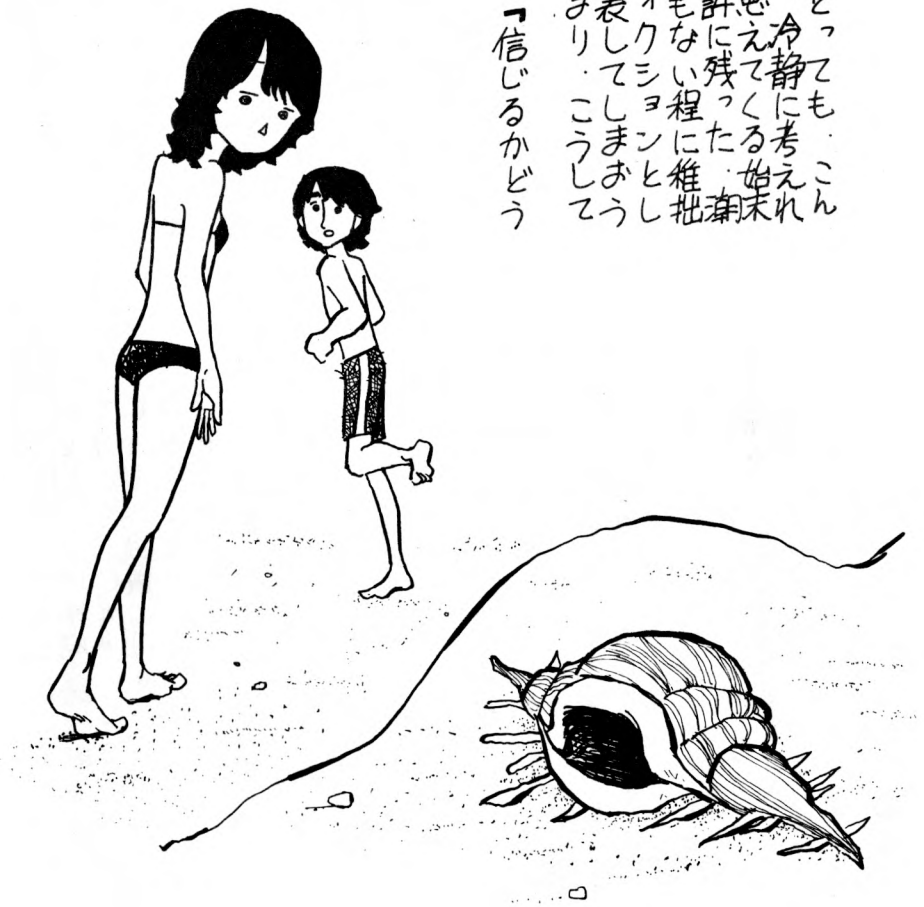
どっかで『休暇中の米、海軍士官、ハリーハンプトン行方不明』などという記事をのせたもんなんて見つからないかなあ。

とJ。

ありっこないよ、そんなの。最近は人間ひとりの重みなんてたいしたことないもの。その上、休暇中で、南の島いなくなってもおかしくない条件がそろいすぎてるもの。」私が反論する。

その数日後だった、台風がやって来て、それまでの、色がラスみたいな海は、あとかたもなくなり、三角波が絵に描いた様な白い頭をつき出して荒れていた。やしの木は実を落し、もちろん我々の仮住いしていた小屋などは、一夜あけたら、みる影もなく、ハリーという人物の描いた書簡もへまた巻き直して小さくなっていたのだ。みごと紛失。誰にも信じてもらうことはできなくなったというわけ

だ。そして、我々二人にとっても、こんな浦島太郎まがいの話は、冷静に考えれば、考える程、嘘っぽく思えてくる始末。そこで、かろうじて手許に残った、潮くさい英和辞典とみっともない程に稚拙な訳を目の前にして、フィクションとしてでも何でもよいから発表してしまおうではないかと相談がまとまり、こうして書いた次第だ。彼が最後に書いた様に、『信じるかどうかは君達にまかせよう』というわけである。



遊びたてられる海の音

私の住んでいた近くに――まあ近くといっても自転車で十五分くらいの近くでしたが――川が流れていました。水路でしたかそんなものなのかもしれません。

私の家は海に近く、大きな港がありました。外国からの商船やら貿易船やらが来ると〝はしけ〟という小さなポンポン船が、その大きな船からの荷物を岸まで運びます。その時にかつやくする〝はしけ〟の一つに私の友人も住んでいました。

そのこはときちゃんという男の子で、はしけの家で暮らし、学校へもその船から通って来ていました。陸の上に住んで用のない私はときちゃんをうらやましくて、彼のふねにはよく遊びにゆきました。あるときには川っぷちにつないでいる家の人にはないしょでにゆきました。私の海えはうるさい大人がたくさんいました。海に落ちるとあぶないとか〝港わん労務者〟と一緒にいるとあぶないとかいう わけでした。そして、小さかった私にも〝港わん労務者〟といういいかたに少なからず陸で豊かに暮しているうちの大人

達の彼らに対する軽蔑みたいな感情を強く感じさせるものがあったせいだったのかもしれませんでした。事実、学校でもときちゃんはよくいじめられていましたことばをときちゃんの目の前で言う子がいたのです。私は、いやだ、ういちなんかと必らずそのたんびに思いました。

よりときちゃんちの方がよっぽどいいんだ。焼玉エンジンだってついるんだし、いつでも家ごとでどこでもいけるんだ、彼の音だってきこえるし、かもめもたくさんやってくる。私とときちゃんとでそのうち海に出て海賊の頭になるんだぞ、と真険に考えていたのでした。海に出るときは、ときちゃんのおとうさんに危いからと言われて岸で待っていたのですが、その時遊んだ川というのが、これからお話をしようと思っている川なのです。

その川はどぶ川のような小さな川でもないのに、ゴミゴミとした家が両岸に並び、川柳の木がところどころにありました。川の三分の二くらいは水の面が出ていて海に向って右側の岸に近い所には一列にはしけが泊りかんぱんにはたくさんはしけがいて、そのひ洗たくものがヒラヒラとしていたのまわりに古タイヤが衝突していっぱいぶらさがれていました。そしてもこわれはぜっていよいよ船のようなものがぶらぶらしていました。ぜごさっぱだの、そのさかなやらだのいごっぽまたなどにつよいうな川の海のさかなやちゃまぜんかもかれたもの逃げてきたかめ金魚やコイなどもたまらまたまるこの亀がありました。子猫や子犬も木箱に乗って流れてきました、考えうるあらゆるものがそこを流れてゆきました。

「あきちゃん海へ向って。或る日などきちゃんがまっ青な顔をしてかけてきて、死体があがったよ、おなかもかおもぱんぱんにふくれて、恐しかった」と教えてくれたことさえもあった。

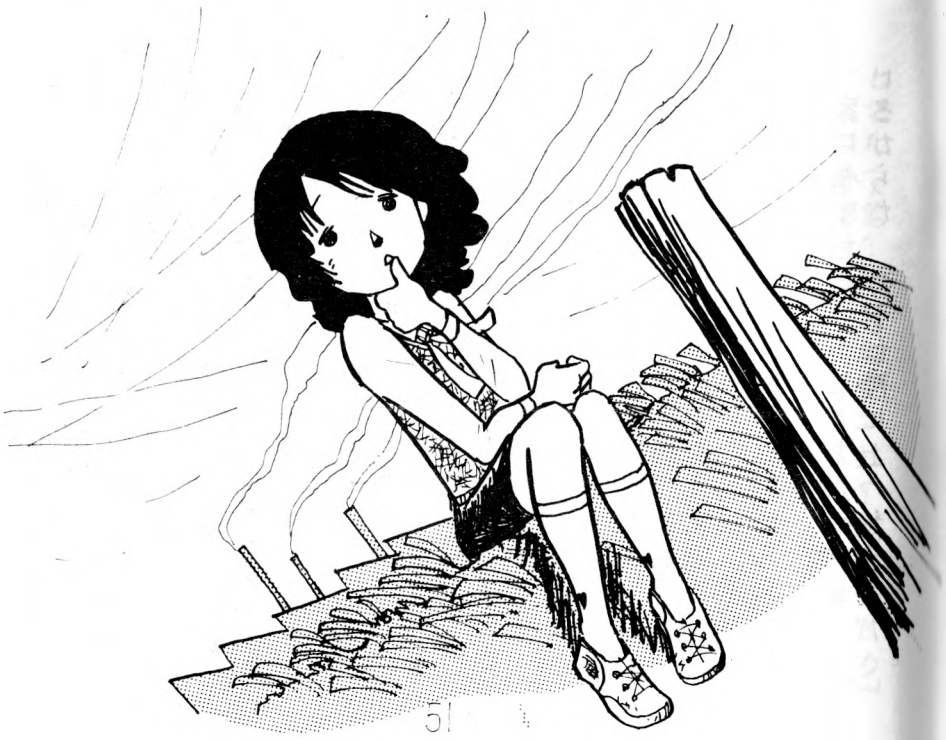
その川が埋め立てられることになったのです。市の政策で、大きな野球場ができるためきたない川を埋めることになったそうでした。緑を愛するという人達が進めた計画だそうでした。

でも、矢板という鉄板で区切られてポンプで水をくみ出され土を入れられていく途中で、水面にはねていた銀色のキラキラした小魚達はどうしたのでしょう！私が工事の最中に川を見にいった三回目くらいのときだったでしょうか。もう大分土を入れた所はかわきはじめていて、バタバタと帆船の帆のようになんとか建設という字をかいたシートが風にいっぱいにふくらんでいた日でした。

ちょうど、私のすわった岸のすぐ左側に高い鉄板が川をせきとめるようにくっきさされていて、その中の水をポンプでかいだしていました。右側はポンプからはき出される水が、まだそこまでは川といえる水面にジョボジョボと落ちていました。私はそれをぼんやりと見やり、悲しいような気分でいると、そのとき、

「あれ、あきちゃんじゃん、どうしたんだい、いまころ」

と驚く程大きな声をかけれました。

「えっ」

と言ってふり向くと、赤褐色に日焼けした、ニッカーズボンをはいたときちゃんが、